

第 21 回 日本緩和医療学会学術大会

e-poster 発表

社会医療法人社団 カレスサッポロ 時計台記念病院 看護部

川人 直子 山本 早苗 近藤 ゆかり 三浦 宣子

痛みシートを活用したカンファレンスの有効性の検討

～看護師の意識の変化に焦点をあてて～

- 【目的】 痛みのアセスメントシート（以下痛みのシート）を使用し、がん疼痛の評価を行っていたが、評価はその日の受け持ち看護師が行ない、評価の共有や継続された評価ができていない状況であった。今回、カンファレンスにて多職種で評価することが、適切な疼痛緩和を行うための一助となるか、看護師の意識の変化に焦点をあて検討した。
- 【方法】 患者毎に週 1 回痛みのシートを用いた多職種カンファレンスを実施。その前後で病棟看護師 13 名にアンケートを行い、結果を比較・検討した。
- 【結果】 「医師・看護師間で症状に対する評価方法が一致している」「医師・看護師間で症状緩和のための一貫した目標を設定している」「医師・看護師間で症状緩和に関するコミュニケーションが取れている」「看護師・多職種間で患者に対する情報共有が出来ている」「がん性疼痛に関する知識が不足している」と思うと回答したスタッフが増えた。
- 【考察】 患者の疼痛目標の共有ができるようになり、評価の視点の統一が図られ情報共有が出来るようになったとの意識の変化が見られた。知識が不足しているとの回答の増加があったが、今まで行っていたアセスメント内容の不足点に気付いたためと考える。評価の視点を変化させ、さらなる知識の必要性を感じるようになるなど看護師の疼痛マネジメントに対する意識の変化が見られたことは、患者の疼痛緩和にむけた第一歩となったと考える。

疼痛を的確に評価することは、疼痛の緩和に向けたケアにとっても重要である。今回、カンファレンスを活用し、多職種で評価することが疼痛緩和に向けた第一歩となった。この研究を通し得た学びを活かし、今後も疼痛マネジメントの充実に向けて取り組んでいきたい。